慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シュリンク覚書 : オデュッセイアとシュリンク
Sub Title	Gedanken zu Schlink
Author	八木, 輝明(Yagi, Teruaki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.50 (2013.) ,p.57- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	八木輝明教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Teruaki YAGI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20130329-0057

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シュリンク覚書
――オデュッセイアとシュリンク――

八　木　輝　明

1

シュリンクの作品にはじめて触れたのは2000年に新潮社から『朗読者』の翻訳書が刊行されてからだった。まずは松永美穂さんの訳本で通読した。それまでこの作家の存在も，またそもそも戦後ドイツ文学にもあまり興味がなかった。現在もそうかもしれないが，文学研究の対象となるのは，それが作家研究であれ，作品研究であれ死後年月が経ち文学史的にもある程度評価が定まっていることが必要だという考えが一般的だったので，現代ドイツ作家に対するアプローチもはじめから消極的になっていた。たしかにいまだにシュリンク研究の第二次文献はほとんど出ていないし，一次文献としてもすべてのこれまでの著作や発言が本にまとめられているわけではない。

ただ筆者は1990年代になって，戦前から日本でよく読まれたドイツ作家ハンス・カロッサの作品をある読書サークルで読みはじめた。きっかけは文学研究のテーマとして〈幼年時代〉を取り上げ，作家がその生涯のある時期自己のアイデンティティを確認するさいに立ち返る〈幼年時代〉の回想のあり方を検証して，作家の記憶と忘却の相互関係をとらえ，そこに作家の生き方の秘密をさぐろうとする意図をもったところにある。この作家は第二次大戦後は文学研究としてはほとんど取り上げられず，とくにド

イツのアカデミーでは無視されたままになっていた。この作家を取り上げるのは，懐古趣味をもったディレッタントと思われるのがせいぜいだった。カロッサがドイツと日本の研究対象から排除されたのは，戦後長くニーチェやワグナーがドイツで評価されなかったのとは多少事情が異なる。おもな理由はカロッサが作家としてまた医者としてナチズムのドイツに留まりつづけたからである。しかもゲッベルスに利用され，ドイツ著作家協会の会長にまつりあげられたと言われつづけた。ナチスドイツに留まったかどうかで戦後の評価が定まってしまう点では，ニーチェやワーグナーより，むしろ反対例としてトーマス・マンやヘッセと比べるべきかもしれない。とくにマンの場合，アメリカ亡命の細かな経緯を検証せず，ただかれが国外亡命したという事実だけを反ナチスの証明として受けとめ，トーマス・マン研究に安心して取り組める風潮ができている。

戦後のある時期まで，ナチスドイツに留まっただけでその作家はクロであり，研究に値しないと単純に見なされる傾向がつづいた。あたかも国外亡命しなかったドイツの芸術家はことごとくナチ協力者であるかのような，単純で愚かな歴史認識が横行し，文学研究の対象となる作家も不当に限定された。

したがってカロッサの『幼年時代』を研究対象とするには，作家としての再評価がまず必要だった。そのためには作家の時代背景としてのナチズムをその歴史的流れのなかで調べ，作家のドイツでのあり方，ナチズムとのかかわりを把握しておかなければならない。もともと筆者は以前からナチズムの研究をするのは底なし沼に踏み込むような感じを持っていた。それくらいナチス関連の文献は多いし，研究のしかたも多岐にわたっている。いずれナチズムの歴史を勉強するにしてもできるだけあとまわしにしたい気持もあった。しかしカロッサを研究するためには，ナチスの時代から，戦後ドイツの〈過去の克服〉のテーマをないがしろにしておくわけにはいかなかった。

前置きが長くなったが，こうしたナチスについての歴史認識と戦後ドイ

ツの〈過去の克服〉のテーマを一通り学びなおしたころにシュリンクの作品を手に取った。『朗読者』には，戦後ドイツの〈負の遺産〉にあえぐ主人公が小説世界に登場し，その生き方が68年世代を生きたシュリンクの生き方と思いに重ねあわされて描かれていて，新鮮だった。そう感じたのは筆者がかれよりは3歳だけ若い世代，日本では〈団塊の世代〉といわれる世代に属していたからかもしれない。それまで日本の〈団塊の世代〉という言葉のもつ無味乾燥さに辟易していたので，ドイツの〈68年世代〉とのコントラストの鮮やかさ，異なる視点が示唆的で印象深かった。さらにこの印象深さのなかには，『朗読者』をはじめとするシュリンクの作品で描かれる突然の性愛描写の奇抜さ，ストーリイの展開をとつじょ断ち切るように現れる性愛場面の違和感も含まれていたかもしれない。ちなみに『朗読者』のI部はミヒャエルとハンナのリアルな性愛描写をもとにしてストーリイが展開している。

2

シュリンクの小説におけるこのとつぜんの性愛描写が，作品としてどの程度必要であるかはいまも疑問を持っているが，この覚書で筆者が書きたいのは別のところにある。

シュリンクという作家に注目しはじめたころは，小説以外の講演集や随筆などの著作はまだ書物の形にはなっていなかった。対談やインタヴューを読むとしたらシュピーゲルやFAZのネット上のものがほとんどだった。あるインタヴューで法学教授，法曹界での仕事のかたわら，なぜ小説を書くようになったかを語っているのを読んだ。大学で法学の講義をしているとき〈自己乖離〉の感覚を覚えた話をしている。2001年にジャーナリストのローヴェア氏と行い，後に『名声のかげで』という本におさめられた対談で次のように語っている。

ローヴェア　「わたくしは小説を書いているとき，熟成過程のように自分の声

を聴き取る」とあなたは以前どこかでお話になっていましたね。それでは執筆していないときには，自分自身でいることが出来るのでしょうか。あるいはときどき自分からそれてしまって驚いたり，自分にそぐわないお気持ちを感じていらっしゃるのでしょうか。

シュリンク　時々そんな気持ちになります。こうした気持ちは，大学の講義をつづけているとき，あるいは講義をしている最中などに不意に自分が話している言葉が，中世の絵にある帯の説明文のように自分の口から一人歩きして離れていくのを実感するとき強くなります。そのとき自分の言葉が自分のものでないような気持ちになり，「私はここで一体何をしているのだろう？」と考えてしまいます。社会活動をしているときにも同じような経験をすることがあります。社会活動のさなかにあって，すべての要求にこたえながら，それでも自分は何者であるのか，という気持ちが残っているのです。以前よくこんな風に考えていました「神様，もう私にはこれ以上つづけられません」と。それでもするべき仕事はなんとかしてきました。でもその行動は内心からの自然な行為ではなく，かなりエネルギーを要することだったのです。それはあとになって，自分が疲れきっているのを感じたときに自覚しました[1)]。

2006年に来日して講演したときにも同じような内容のことを話していたと思うが，この作家は自己のアイデンティティを垂直に問いかける感覚を持っている。おそらくここに法律家から文学者への彼の転換点があり，大学退職後の現在，おもに小説の執筆活動に専念しているのもこうした作家感覚を忠実に生きようとしているためだろう。ここにはまたシュリンクの作品のおおきな魅力があり，小説の独特の語り口，つぶやくようなモノローグのリズムを生み出している要因があるかもしれない。ちなみに彼の小説の大きな特徴は，『朗読者』以前に書いたミステリー小説でおもに用いたナゾめいた語り口にある。

彼の〈自己乖離〉の感覚は，別の見方をすれば，「自分は何者であるのか」という問いかけに通じている。自己とは何かという問いには，ふつう答えがない。あるいは少なくとも即答ができない。しかしこの茫洋で孤独な問いかけは初期の作品のなかにいつも漂っている。よどんだ重い空気の

ようにまとわりつく問いは，『朗読者』からはじまる一連の作品や講演のなかで形をかえ，主に「故郷」「ユートピア」などの言葉に象徴的にあらわされている。そしてこれらの言葉は過去の古典的作品『オデュッセイア』を引用，言及しながらじょじょに深められ，シュリンク独自の解釈がほどこされるようになる。『朗読者』のⅢ部で服役中のハンナにカセットに吹き込んで郵送する最初の物語は「オデュッセイア」だった。映画「愛を読む人」のなかでも，全体としてずいしょに「オデュッセイア」が取り上げられ，言及されていた。

実はこの小説の後半で述べられたハンスの言葉

> 私は当時『オデュッセイア』を再読していた。初めて学校で読み，帰郷の物語として記憶していた。しかしそれは帰郷の物語ではなかった。おなじ川の流れにもどれないと知っているギリシア人がどうして帰郷を信じられるだろう。オデュッセウスは留まるために帰郷するのではなく，新たに出発するためだった。オデュッセイアはある運動の物語，目的があると同時にまた目的のない，成功しまた失敗するある運動の物語だった。法律の歴史もこの運動と同じだった[2)]。

いわば純文学としてのデビュー作ともいえる『朗読者』のこの言葉のなかには，これ以後の作品でくり返される問いかけとその答えがほぼすべて書きこまれている。

『朗読者』の原著は 1995 年に出版され，2000 年に 7 編の短編を収めた『逃げてゆく愛』が刊行され，2006 年長編小説『帰郷』が出る。『帰郷』は主人公の父親探しがテーマになっていて，この後半でアメリカの大学で脱構築批評を講ずる父親とおぼしきド・バウアーの言葉をかりて独自なオデュッセイア解釈が展開される。

3

この小説で主人公はドイツでの長い父親探しのあと，単身アメリカに渡

り，父と思われるド・バウアーの大学講義を聴講したときの様子を次のように述べている。ここにはシュリンク独自のオデュッセイア解釈が含まれているので，長くなるが引用してみたい。

ド・バウアーの本と同じように彼の講義も『オデュッセイア』からはじまった。しかし私が初めて読んだとき考えたような，あらゆる帰郷物語の原型としての『オデュッセイア』の話ではなかった。

「すべての帰郷物語の原型として『オデュッセイア』を理解するやり方は脱構築されねばならない。読者のなかにある憧れの気持だけが『オデュッセイア』を帰郷を目的とする首尾一貫した物語として見ようとしている。この憧れがなければ別の容貌が見えてくる。オデュッセウスは帰郷を目ざしているのではなく，まずはこちらの女性，次はあちらの女性のところに寄り道している。帰郷するのはみずからの決断からでなく，神々の決定にしたがったまでである。異郷での自分の状況ではなく，故郷イタケでの妻の状況が解決を求めているからだ。求婚者たちがペネロペーの行動，昼間つむいだ織物を夜に解きほぐす計略を見抜き，織物を完成させてかれらの一人と結婚せよという約束の実行を迫っていた。そしてオデュッセウスはじっさいには本当に帰郷していない。まもなく旅立たねばならない（下線筆者）。この旅立ちには無事の帰還が約束されているが，だからといって確約されているわけではない。それ以外にも，読者の憧れと希望は見かたを誤らせてきた。オデュッセウスは全世界を航行によって測量した。あの当時知られていて恐れられていた世界の測量，全世界をくまなく計量することがオデュセウスの航海の旅に意味を与えていると読者は考えたかった。しかしオデュッセウスは欺瞞者と読むことができる。彼の航海の旅がどのようであったかを読者が知るのは，彼がパイエケス人に語る物語を通してのみである。かれらの耳に心地よく潤色する必要があった（下線筆者）。オデュッセウスの虚偽と策略はときに啓蒙的な効果を発揮した。そのおかげでポリュペモス（キュクロプスの眼―S.236 上巻），キルケ，セイレンの魔力を脱することができた。しかし後に彼は，虚偽の物語はうまく語られると耳にはいりやすいという理由から女神アテネ，妻，息子，実父をあざむく。オデュッセウスは自己に忠実だったのだろうか。自己に忠実な欺瞞者は，みずからを巻き込み，われわれをパラドクスに陥れ，誠実さを裏切りに変えるのだ」[3)]。

とくに『オデュッセイア』は，長いあいだ読者によってホメロスによる古典作品であるという理由から，10 年もかけてトロイ戦争から帰還する誠実な主人公オデュッセウスの冒険物語と思われてきた。途中いくたの危険にさらされながらも故郷イタケに帰りつき，妻ペネロペーに言い寄ってきた求婚者たちを殺害し，ハッピーエンドに終わる英雄譚とみなされてきた。子供用に易しく書き換えられていない原作を読んでも実際にはそのように読める。これをド・バウアーは「読者のなかにある憧れの気持」，あるいは読者による理想化，美化といっているのだ。むろん『オデュッセイア』を厳密に読み解き，近代の知の問題を提起する『啓蒙の弁証法』のような書物もある。

順序は逆になるが，まず二つ目の下線部分に関して。「オデュッセウスは欺瞞者」は言いすぎだとしても，ここには語り手，あるいは物語りをつむぐ書き手の想像力の実相が指摘されていて興味深い。機知と謀略に富むオデュッセウスのしたたかさは，自衛と防御，ときに容赦ない攻撃のなかに遺憾なく発揮されるが，他方旅の途中や故郷に帰ったときの自己の過去を語るときの巧みさ，あるいは語りながら自己韜晦していくなかに十全に現れている。この語りのもつ性質は，語り手である小説家というものの言説の在りようを述べているようにも思われる。

問題ははじめの下線の方である。「じっさいには本当に帰郷していない。まもなく旅立たねばならない」という言葉は，のちに述べるシュリンクの「帰郷は可能か？」の結論ともいえる主張だが，『オデュッセイア』では第十一歌の冥府で語られるテイレシアスの予言に関係している。「そなたが帰宅すれば，この者たちの乱暴狼藉を懲らしめることは必ずできようが，しかし屋敷の内で求婚者どもを，策略を用いるなり，堂々と鋭利の剣を揮うなりして討ち取った後は，手ごろの櫂を手に持って，海を知らず，塩を混ぜた食物を食うこともせぬ人間たちの住む国に達するまで，旅を続けねばならぬぞ」[4)]。

この予言を『オデュッセイア』の異説を含めてどう解釈するかは別とし

ても，予言はオデュッセウスの帰郷の成就，帰還の幸せな結末を約束していない。故郷に帰ったあとの再度の旅立ちを示唆している。『朗読者』からの引用を思い出してほしい。「オデュッセウスは留まるために帰郷するのでなく，新たに出発するためだった。オデュッセイアはある運動の物語，目的があると同時にまた目的のない，成功しまた失敗するある運動の物語だった」。この言葉と予言内容は，終着点のない旅の継続という点で一致している。いずれどこかの目的地に帰着してついにアイデンティティを成就するというイメージはない。自己の生を「ある運動」ととらえること，それも終点のない，果てしない運動としてとらえるようにと語っている。しかしそれでもシュリンクは長いあいだ著作や講演のなかで「帰郷は可能か」「ユートピアとしての故郷」をテーマとして語りつづけてきた。

この作家ははじめから即答のない問いかけを，そうと予感しつつあえて問いつづけてきたように思われる。アイデンティティがいずれ確認できる故郷，家郷を思い描いてきて，結局それが幻想であるとじょじょに実感しはじめた。

ド・バウアーの講義冒頭の「オデュッセウスは帰郷を目ざしているのではなく，まずはこちらの女性，次はあちらの女性のところに寄り道している。帰郷するのはみずからの決断からでなく，神々の決定にしたがったまでである」という主張は「読者の憧れ」を取り去り，古典的物語を美化なしに読んだときの『オデュッセイア』の別の側面を明らかにしている。トロイ戦争から故郷イタケへの帰還の十年間のうち，七年間はカリュプソと同棲し，異説によれば二人の子をもうけ，さらにキルケと一年間をともに過ごし，やはり異説ではテレゴノスという息子をもうけている。カリュプソから約束された不死身の生を拒み，望郷の念にかられつつも二人の仲はむつまじい。妻ペネロペーではなく，この二人の女性（女神）との関係の指摘は，性愛を通して主人公の生の独特の形を描くのを得意とする小説家シュリンクならではのものだ。ここにはまた虚飾を排したリアルな作家の眼が光っている。

4

2000年に刊行された『ユートピアとしての故郷』は，前年ベルリンで行われた講演をまとめたものだが，21世紀への転換にあたっての激動する世界情勢を踏まえた内容ではあるが，ややテーマが拡散している。壁の崩壊，ソ連邦の崩壊と東欧圏の変化，東西冷戦の終焉のなかでの大量移民の発生とかれらの祖国を意識した「故郷」を問題にしているので，文学のテーマとしてはまとまりを欠いている。

さらに上述した2006年の長編小説『帰郷』が出て，その出版後にかれの故郷ハイデルベルクに同書の朗読をかねて訪れた際，ライン・メルクール紙とのインタヴュー（以下の引用ではこのインタヴュアーをRMと略）に応じている。冒頭で『オデュッセイア』と関連した〈帰郷〉は可能かという質問を受け次のように述べている。

RM　一般的に故郷という言葉をあなたはどのようにお考えになりますか。
シュリンク　帰郷とは，故郷へ帰ることです。景色，街，河，山と平野のつらなり，そこに住む人びと，土地のなまり―すべて故郷を思わせるものです。しかし帰郷は成功しません，むかし生活していた同じ場所に戻ることはできないからです。その場所はすでに変化し，わたくしたち自身も変化しているからです。
RM　あなたは新作小説で，以前から人気のある帰郷の物語のジャンルをふたたび取り上げ，ご自身の世代と同じ主人公に自分を重ね合わせました。彼は作中での小説の書き手を探し，その人物が自分の父親だとわかるのです。このテーマに引きつけられる理由はなんなのでしょうか。
シュリンク　さまざまな理由からです。以前から「オデュッセイア」の物語に私は興味がありました。「オデュッセイア」を読みながら「新たな体験」をしたのです。オデュッセウスは帰郷まで10年も旅をしつづけ，冒険に冒険を重ねた主人公だと思いつづけてきたのですが，ある時かれは1年以上は冒険の旅をしていない，残りのときをカリプソのもとで幸福に暮らしていたのだと分かったのです。もうひとつの重要な「新たな体験」は，オデュセウスは

故郷イタケに帰還したが，そこに留まることができず，ふたたび旅立たねばならなかったのです。かれは見知らぬ異郷で死ぬのです。「オデュッセイア」の偉大な帰郷の物語は，帰郷が不可能であることを教えています[5)]。

もうこのシュリンクのインタヴューに対する解説は必要ないだろう。ほぼこれまで筆者が述べてきた内容のくり返し，確認にすぎない。しかし帰郷は存在しないときっぱり述べたシュリンクのインタヴューを読んで，それでは彼のアイデンティティの源泉である〈故郷〉とは何だったのか，空間としての故郷がないとしたら，どこに作家の拠って立つ場があるのだろうか。長くシュリンクの作品を読んできて，この点をある程度問いつめ，さぐってみたい気持を持ちつづけてきた。

その糸口は，2011 年に刊行された『書く行為について』におさめられた，この前年のハイデルベルクの講演「故郷について書く」のなかにあるかもしれない。この講演には，これまでの「故郷」に関する論述のくり返しもみられるが，新しい視点として次のようなくだりを引用してみたい。

私がドイツ語で書くところ，そこが私の故郷なのです。私が小説で描き出した場所のなかに故郷を創りだすのです。アメリカに滞在しているあいだドイツ語が使えなくて困りませんか，ドイツ語で執筆するために母国語で話したり聞いたりする必要性を感じませんか，ときどき質問されます。実際アメリカに移住することは考えられません。アメリカでは鳴り響かない教会の鐘，アメリカでは啼かないつぐみの声を聞けないのは寂しいことです。アメリカの国立公園以外の自然を所有できないのも，もちろんドイツ語を使えないのも不自由なことです。しかし滞在しているあいだ，ドイツ語が使えなくても困りはしません。アメリカ滞在はかえってドイツ語に親近感を与え，貴重なものに感じさせてくれます。ドイツ語で書く小説の場所のなかに自分の故郷を創りだすのはそれほど意識的な行為ではありません。アメリカで執筆するときも，それほど意識していません。
ロシア亡命作家ウラジミール・ナボコフもドイツ亡命作家トーマス・マンも同じ体験をし，同じ考えを持ったにちがいありません。（……）故郷とは私た

ちがいきいきと保ち，いきいきとしていられる場所です。書く行為は特別力強い，豊かな生命活動です。
では故郷とはユートピアではないのでしょうか？そうとも考えられます。故郷をどこかにある場所，私たちがそこから出発して，そこに帰っていく場所と考えるのはユートピア的な考えであるように思います。私たちが帰っていく場所は，そこから出発した場所と同じではありません。帰郷を文学的にあつかうなら，そこに苦痛，悲哀，幻滅，諦めが生まれ，甘美なもののなかにほろ苦さが混じりあいます。帰る場所はもはや以前と同じ場所ではなく，そこにいる人びとも以前と同じ人ではありません。同じ人びとがいたとしても，帰郷する者にとってはもう同じ人ではなく，本人自身も以前のままの自己ではありません。地理的に同一と考える故郷はユートピア（理想郷）なのです。それはあやうさを孕んだ考え方です。つまり地理的に同じだから故郷だと主張するのは，結局そうしたい気持を押し通すことであり，自己の良心との戦いになります。そうなら故郷とはただ自明で当たりまえのものにすぎないからです。
私たちが創りだし，いきいきと保つ故郷とは違うものです。故郷は私たちに属していて，誰からも否定されず，また誰にたいしても否定できないものです。他の人と故郷を共有しても故郷は減るものではありません。他の人が故郷の共有を望まず，それでも私たちがそれを持ちたいのならば，別にその人たちから奪わなくても所有できます。故郷は限定されてはいますが，その境界は流動的です。生きる歓び，旅のあり方に応じてわたしたちは多かれ少なかれ故郷を持つことができます。故郷とは書物のなかにあり，舞台の上に，さらにスクリーンのなかにあり，最終的には私たちの頭と心のなかに存在するものだからです（下線筆者）[6]。

これがシュリンクの一応の帰結であるようだ。つまり「故郷」とは，自らの積極的な創造行為によって作りだすものであって，特定の場所としての自分の生まれ故郷ではなく，頭と心のなかに存在するものだとシュリンクは語っている。正確にいえば，創造行為によって作りだすばかりでなく，その創造行為を支えるいきいきした情熱が重要なのだと言っているように読める。

2 章で『朗読者』から引用した言葉を思い返してみよう。「……おなじ

川の流れにもどれないと知っているギリシア人がどうして帰郷を信じられるだろう。オデュッセウスは留まるために帰郷するのではなく，新たに出発するためだった。オデュッセイアはある運動の物語，目的があると同時にまた目的のない，成功しまた失敗するある運動の物語だった」。

つまりこの作家のデビュー作にすべてが言い尽くされているといえる。われわれには安住する場所はなく，安住したとしてもまた出発しなければならない。帰郷はするが，そこは安住の場ではなく，次の出発へのステップとしてある。しかもどこが最終的な目標か定かでない。たえざる生の運動そのものがそのままで生である地平。情熱的，積極的な永遠の運動が生の意味であると語っているように思える。

よく語られる，もっとふつうの言い方をすれば，「わたしはどこから来て，どこへ行くのか？」「わたしとは何か，わたしのアイデンティティは？」という問いに対する答えはここからは導きだせない。たとえわたしの本質と思えるものをなんらかの言葉で定義してみても，次の瞬間それは溶解し，つかみどころのないものに変わり，砂をつかむようにこぼれ落ちてしまう。「人生の目標」というものは抽象的に考え，答えをだしても，つぎの瞬間にはその輪郭を失い，あいまいな，とらえどころのないものに変形してしまう。シュリンクの問いかけは，長い年月（としつき）の具体的な生活とさまざまな諸相のなかで各自が実感し，確認していくものなのかもしれない。

そしてもうひとつ重要なのは，自己の故郷につながるアイデンティティ，あるいは生きる原理を垂直にもとめるのは，むしろ哲学の役割であり，文学それも小説の意義と役割はそれとは別のところにあるということだ。

筆者はオデュッセイアをめぐるシュリンクの思索のあとをたどりながら，いつもニーチェの「永劫回帰」という言葉を思いかえしていた。「オデュッセウスは留まるために帰郷するのではなく，新たに出発するためだった」。

注

1）Rohwer, Jörn Jacob „Hinter dem Ruhm“, Steidl Verlag, Göttingen 2005.
2）Bernhard Schlink: „Der Vorleser“, S. 173, Zürich, 1995.
3）„Die Heimkehr“ Bernhard Schlink, S. 290, Zürich, 2006.
4）『オデュッセイア』上巻，岩波文庫，282 頁，1994 年。
5）http://www.rheinischer-merkur.de/index.php?id=13076
6）Bernhard Schlink: „Gedanken über das Schreiben“ S. 83ff, Zürich, 2011.